

乗雲

寺報
第93号

H28.3.1 発行

編集人

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560
広厳寺
住職 神田英俊

メール

otera@kogonji.jp

親も子も仏の道に変わりなし、
生きて彼岸を迎うしあわせ

彼岸御詠歌 (香華)

もうすぐ春のお彼岸がやってきます。「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおり、春の彼岸頃にはようやくやぐ寒さも和らぎ、毎日が過ごしやすくなります。中日(春分の日)をはさんだ一週間は自らの心を見つめ、ご先祖に感謝をし、日頃の生き方を振り返る七日間です。中日は太陽が真西に入り、沈む方向が西方極楽浄土となります。「彼岸」は向こうの岸、それと反対の「此岸」は今のこの住んでいる世界、あらゆる苦悩に満ちたところとされています。できたら、できることなら彼岸に行きたい。しかし、この世の中ではそんな理想の世界はありません。では「生きて彼岸を迎う」とはどういうことでしょうか、これは自分の心の持ち方であり、清らかな心を持って生き

ることが彼岸に到る道です。この世の中のことは娑婆(しゃば)世界と言っていますが、娑婆は堪忍土(かんにんど)とも訳し、堪え忍ぶところとされています。



蓮は仏教の花ですが、泥の中にあつてきれいな花を咲かせます。思い通りにならない苦悩に満ちた世界を泥とし、その泥の中にあつても美しい花を咲かすことができます。蓮はとお釈迦様は説かれます。蓮はこの堪忍土にあつても、菩提の花、仏心の花が咲くのだと教えてくれ

ています。

さて、お彼岸の一週間はどんなことを心がけて暮らしていけば良いのでしょうか。經典には「六波羅密」という六つの実践徳目をあげています。①布施波羅密(物でも心でも惜しまず与える)、②持戒波羅密(教えを守る)、③忍辱波羅密(苦難に堪え忍ぶ)、④精進波羅密(教えに向かつて進む)、⑤禪定波羅密(静かな心を保つ)、⑥智慧波羅密(最初の五つの実践によって般若の智慧を得ることができると)。どれをとつても容易にできることではありませんが、いつかはきれいな心の花を咲かすことができるように、日々心がけて暮らしていくことが大切です。

四月二十四日、臨済宗の松山大耕師を講師にお招きし、仏教講演会を開催しますが、師は、著書『大事なことから忘れなさい』の中で、「心の洗濯」で、自分の心を清浄に保つことが大事であると述べています。お彼岸も心の洗濯をする期間、また、講演を聴くことも普段の生活を見直す、心の垢を落とすよい機会と思えます。

平成二十八年度年回表

「回忌」	「没年」
一周忌	平成二十七年
三回忌	平成二十六年
七回忌	平成二十二年
十三回忌	平成十六年
十七回忌	平成十二年
二十三回忌	平成六年
二十七回忌	平成二年
三十三回忌	昭和五十九年
五十回忌	昭和四十二年
百回忌	大正六年

＊今年(平成二十八年)の年回忌表です。正当の各家には昨年十一月に通知しています。
＊日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせいたします。

▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は九六年目が七回忌、九十二年目が十三回忌となる。